

アメリカ進歩主義幼稚園の改革運動と〈砂場〉

—— 砂場と大型積木開発からの示唆を中心に ——

橋 川 喜美代

(キーワード：砂場、大型積木、進歩主義幼稚園)

はじめに

1885年夏、マサチューセッツ州緊急対策及び衛生協会(Massachusetts Emergency and Hygiene Association, 以下 MEHA と略す)は、ボストンのパーメンター街の礼拝堂の庭に〈砂場〉を設置した¹⁾。これを契機に始まるプレイグラウンド運動は、アメリカのフレーベル主義保守派の保育を根底から問い直したケンタッキー州ルイスヴィルの無償幼稚園教師ブライアン(Bryan, A.E.)と弟子ヒル(Hill, P.S.)ら進歩主義幼稚園運動家たちに大きな影響を及ぼした。

ブライアンは、1890年の「全米教育協会」(National Education Association)において「文字は人を殺す」という演説を行った。この歴史的演説に始まる恩物批判は、ブロー(Blow, S.E.)らフレーベル主義保守派による象徴主義的な恩物崇拜を突き崩すきっかけとなった²⁾。ブライアンは恩物による遊びを自由遊び(free play)と指示的遊び(dictation play)に大別し、恩物の材料や用具を予め定められた手続きに従って公式通り教える方法を厳しく批判すると共に、幼稚園教師が子どもの内的状態や要求に応じて臨機応変に知恵を働かせるよう強く求めた³⁾。その改革への1つの試みが、フレーベルの恩物作業の連続性の中に、子どもの生活経験に基づいた主題を導入することであった⁴⁾。つまり、“おばあさんの家へ出かける”といった課題活動は、恩物作業による「受動的で文字通りの連続性ではなく、活動的で創造的な連続性⁵⁾」を子どもたちに生み出し、子どもが集中して活動に取り組む可能性を模索するための試みであった。この小さな試みは、やがてヒルやブラットによって発展・継承される。

フレーベル主義保守派とヒルら進歩派との論争は、1890年代から1910年代にかけて激しさを増すが、その争点の1つに自由遊びと教師主導の遊び(directed play)の関連性があげられる⁶⁾。これを本格的に実験し始めたヒルは1898年、プレイグラウンド運動の父、ギュリック(Gulick, L.H.)と共に大型積木を開発した。ヒルの最初の床上積木はフレーベルの恩物から派生したものであるが、ヒルはブライアンとの研究以来、大筋肉の

発達には大型積木の方が適していると考えていた⁷⁾。1904年、ヒルはコロンビア大学ティチャーズ・カレッジに講師として招聘された。1896年から講師であったブローとの対決が目論まれたヒルの招聘は、1909年にブローが辞職する形で終結した⁸⁾。この間に、ヒルは自ら開発した積木を使って実験を続け、この積木を使った遊びに触発されたブラットが1914年、ニューヨークのグリニッチ・ヴィレッジのアパートに、スラムの4歳から5歳の子ども6人のプレイ・スクールを開校した。

1890年代から1910年代の幼稚園の改革動向は、一斉画一的な恩物教授法への批判によって、自由遊びと教師主導の遊び効果の研究へと進んでいく。〈砂場〉設置に始まる遊び場運動は、子どもと遊びながら指導する大人の役割を問い直させる契機となった。それはブライアンが「為すことによって学ばなければならない。私達は独力で考えなければならない。たとえ、他の誰かが考え、実行していたとしても」、自ら考え、為さねばならない⁹⁾、と主張したように、眼前の子どもの状態を無視した教師の指導は、子どもの自由感を窒息させ、非行や犯罪を増大させる危険性があるからである。

本研究は、幼稚園や砂場設置によって浸透する遊びへの社会的認識の高まりを明らかにしながら、大型積木を使った床遊びに展開する子ども流学習法が進歩主義幼稚園の改革を生み出し、子ども中心主義の教育を確立させていく過程を辿ることを目的とする。

I. 幼稚園運動と〈砂場〉設置の機運

南北戦争後の盛況、鉄道への過度の投資が直接の原因となって生じた1873年恐慌は、全国的な慈善組織化運動を活性化させた¹⁰⁾。南北戦争前から始まった都市への人口移動はその後も衰えを見せず、90年にはアメリカ国民の30%を都市に移住させ、ニューヨーク、シカゴ及びフィラデルフィアを100万人都市にまで急成長させた。こうした大都市にはびこる組織的犯罪、政治腐敗、疾病の蔓延は、貧困・非行・不衛生とスラムの子どもたちの生活とが対にして語られるまでに浸透した。1870年代後半から博愛家たちによって開設され始めた無償幼稚園は90

年頃にはその教育的効果が認められ、幼稚園を公教育体系に編入する動きが各州に起こってくる¹¹⁾。より多くの子どもたちに門戸を開き、幼稚園の公共性が進むに連れて起こってきた問題が、幼稚園教師の質の低下と形式化した指導である。

ボストンの〈砂場〉設置の成功は、戸外遊び中心の幼稚園運動となり、1890年代にはモデル・プレイグラウンド(模範運動場)を各地に発展させる契機となった。ここではまず、〈砂場〉設置の提案者である女医ザクルシェフスカ(Zakrzewska, M.E.)と幼稚園運動家ピーボディ(Peabody, E.)との関係を概観しながら、幼稚園運動との接点を明らかにしておく。

1. ピーボディとフレーベル主義幼稚園の受容

ピーボディとザクルシェフスカの出会いは、1868年3月10日に結成されたニューイングランド女性クラブ(New England Women's Club)であった。「遊びへの関心は幼稚園運動によって普及したのであり、砂場と幼稚園とは同義語である。幼稚園の支援者たちがプレイグラウンドの推進者でもあった。」と指摘されるように、ピーボディによる幼稚園運動が遊びへの社会的認識を高め、〈砂場〉設置の重要性を認識させる基盤となったと言っても過言ではない¹²⁾。

ピーボディは1859年、ボストンで開催された集会で、シュルツ(Schurz, M.)と娘アガテに出会う¹³⁾。ドイツ移民シュルツは1856年、ウイスコンシン州ウォータータウンに、ドイツ語幼稚園を開設していた¹⁴⁾。これはフレーベル(Froebel, F.)直伝の幼稚園理論と実践に基づき、娘や親族にドイツ文化を受け継がせるためのものであった。この2人の出会いが、ドイツ移民の居住地に限られていたドイツ語幼稚園をアメリカに根付かせる契機となった。

アメリカにおけるフレーベル主義幼稚園の受容は、1830年代に顕著となる子ども観・女性観の変化によってその素地が築かれていく。植民地時代からアメリカ人の精神を支えてきたカルヴィニズム的子ども観は、19世紀における福音主義的傾向をもつ超越主義の台頭によって、子どもの内面を発見しようとする子ども観へと転換し始める¹⁵⁾。植民地時代のカルヴィニズムの原罪的子ども観を支えた家父長制度は工業化に伴って崩壊し始め、父親の厳格な罰によって子どもの自律性を抑圧し、意志を挫く外的服従ではなく、内面的・自発的服従を求める傾向が強まる。これを支えたのが女性観の転回であった。工業化の進展は、女性を労働分野から締め出し、家庭こそが女性の領域だといった「家内性」礼賛イデオロギーを浸透させていく。これは女性の直観と繊細な感性が、子どもの性格形成にもたらす影響力を強調し、女性が教育に果たす役割を大きく規定した¹⁶⁾。

1860年、ピーボディはアメリカ初の英語幼稚園をボストンに開設した。30人の子どもに2人の助手、フランス語教師と体操教師が展開する幼稚園教育は人気を博し、経済的成功を収めた。ところが、ピーボディはこの自己流のやり方が知的に偏り、幼稚園本来の成果を生みだしていないことに悩み始める。1867年、この悩みを解消するために訪欧したピーボディは、ハンブルグやドレスデンの幼稚園を見学した。そして、アメリカに幼稚園を樹立するにはドイツ人幼稚園教師を招聘し、幼稚園教員養成校の設立から始める必要性を痛感して帰国した¹⁷⁾。ピーボディはこの間の経緯を次のように語っている¹⁸⁾。

「最も著名な幼稚園は、ボストンにある私自身の幼稚園である。しかし、私は正直言って、フレーベルの保育法から必然的に約束された結果が生み出せず、彼が批判しているような結論に陥ることによって、自分の幼稚園に根本的な欠陥を認めざるを得ない。財政的成功や、かわいい遊戯学校での子どもたちや親たちの喜びに騙されて、根本的な欠陥を見逃すことはすまい。そうした理由で1867年、私はフレーベルや彼の弟子が開設した幼稚園を見学しようと欧州へと旅立った。1868年、私は自己流のやり方や類似したすべての誤りを捨て去り、幼稚園教員養成の適切な基礎にもとづいて、真の幼稚園を打ち立てたいという強い熱意を持って帰国した。」

1868年秋、残された生涯を幼稚園運動に捧げるべく帰国したピーボディは12月21日、ニューイングランド女性クラブで演説した。ピーボディはここで①遊び観、②幼稚園設立、を訴えた。遊びはあらゆる学びの基礎であり、「単なる気晴らし」や「業間の休み時間」ではないこと。幼少期から子どもの身体と創造性、さらに道徳性を育てるためには、幼稚園の設立と熟練した幼稚園教師の養成が不可欠だと説いた¹⁹⁾。

ピーボディは言う。「教育とは『知恵と無知との神秘的な交わり』であって、道理に叶った宗教の前提とされているものである。……教育とは天と地における人類の最高の機能であり、われわれの全てを互いに、神の愛に結びつける連環の輪を繋ぐもの²⁰⁾」である。フレーベルが幼稚園に込めた教育の原理とは、「数家庭の子どもを集め、子ども部屋の愛育(子どもは生きた有機体であるという考えで扱うこと)の法則を敷衍し、毎日数時間、遊びの中で繰り返し体験することによって、何よりも子どもたちに生命への博愛心を培うことにある。遊びにおいて身体的な力が使われ、人間の幸福や善意は社会的で、高潔であることを経験をもって分からせる²¹⁾」ところにある。ピーボディがルソーやバスタロッチよりもフレーベルを評価したのは、「人格形成を第一義とし、知識を善の補足物とするフレーベルの教育思想は時代の切実な要求であって、至福千年を約束する²²⁾」こと、つまり知識の開発よりも、道徳的訓練を重視した点にある。

さらに、ピーボディは、女性を幼稚園教師として養成することはその本能に潜む純真な愛を浄化し、嫌悪感を抱かせるような苦役と化した教育を神の創造を担う職種へと高める上で不可欠だと考え始めた。

2. 女医ザクルシェフスカと＜砂場＞設置

ザクルシェフスカは1829年9月6日、7人兄弟の第1子としてベルリンに生まれた。ベルリン慈善病院ドクター・シュミット教授の推薦を受け、弱冠22歳の若さで産科婦長に抜擢されるほど嘱望されたザクルシェフスカは、シュミット教授の急逝を機に、新天地を求め妹と共に1853年に渡米した。ニューヨークでの貧しい生活を経験しながらも、1年後にはブラックウェル女医の助手を経て、オハイオ州クリーブランド医科大学に進学し、1856年に医師の資格を獲得した。ニューヨークからボストンに移ったザクルシェフスカはニューイングランド婦人子ども病院を創立し、女性医師の第一人者、女性解放のパイオニアとして活躍した²³⁾。

＜砂場＞が設置された19世紀のボストンは、アメリカ合衆国有数の海湾都市であり、商工業・文化・教育の中心として栄え、世界の中心とまで言われた。1813年、アメリカで最初の繊維工場が建設されたボストンは、工業化の先進地域の役割を果たした。1830年には鉄道が敷設され商業都市としても発展し、19世紀後半には銀行、保険、投資といった金融業の中心となった。その後も鉄鋼、造船、機械、印刷や食料品などの諸工業が発展し、ニューヨークやシカゴには及ばなかったが、豊かな資本は当時の西部開発にも投資された。こうした工業化の促進は、19世紀半ば以降の多量のアイルランド移民の流入、それに次ぐフランス系カナダ移民、イタリア移民などの安上がりな労働力に支えられていた。都市化・工業化の発展に

よってこうした移民達は過酷な生活を強いられ、失業や貧困、不衛生で劣悪な環境は犯罪の温床となった。

マサチューセッツ州緊急対策及び衛生協会（MEHA）は1884年、ボストンに健康教育プログラムを用意するために組織された。この設立を支援したのが、ニューイングランド女性クラブである。協会はウェルズ（Wells, K.G.）指導のもと、組織管理を司る実行委員会、財務委員会、応急手当や緊急事態への対応を問われる警官と消防士委員会、学校保健に関する委員会など10の委員会が組織された²⁴⁾。

MEHAの委員会は、知識層を中心としたニューイングランド女性クラブとは異なり、労働者の劣悪な都市生活を保健衛生面から改良する事業に取り組んでいた。ザクルシェフスカら婦人子ども病院の医師が多く講演者として活躍したのも、その専門的知識が求められていたからである。

さて、レインウォーター（Rainwater, C.）は、砂場設置の経緯を次のように説明している²⁵⁾。「遊び場設置運動の起源として最も頻繁に指定を受けるのは、ボストンの砂場である。1885年夏、ベルリンを旅行中のザクルシェフスカは、貴賤の別なく子どもたちが警官の監督のもと、公園の砂場で遊ぶのを見た。マサチューセッツ州緊急対策及び衛生協会の実行委員会会長ウェルズに手紙によって報告した結果として、大きな砂場がパーメンター街の礼拝堂及びウエスト・エンド保育所の庭に設置された。」

図1に示すように、ニューイングランド女性クラブのメンバーたちはピーボディの幼稚園に関する講演によって幼稚園の専門家まで育て上げられていた。家庭支援・健康・衛生専門の講演を担っていた²⁶⁾ザクルシェフスカやウェルズもその例外ではなかったはずである。ザ

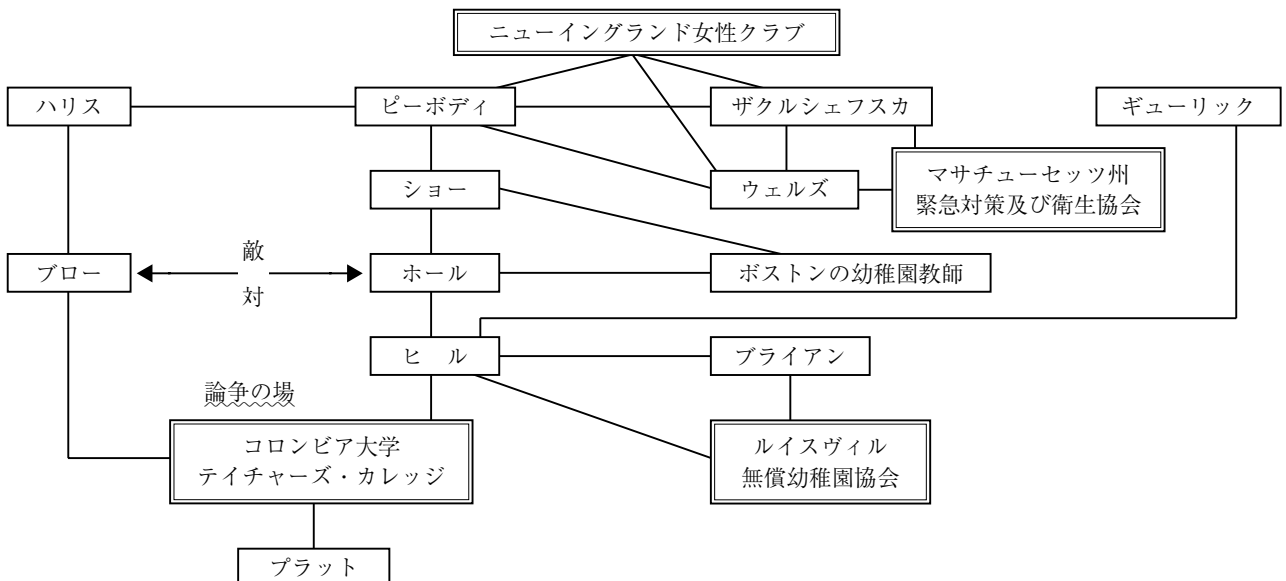


図1 プレイグラウンド運動と進歩主義幼稚園発展までの系譜

クルシェフスカがベルリンの〈砂場〉に注目したのも、それをボストンに設置するという提案を聞いたウェルズらが興味を示し、賛同したのも、こうした素地から考えれば当然の成り行きであった。そして、幼稚園がボストンの公立学校体系の一部として認められ、そうした幼稚園を組み入れた学校に砂場が設置されていく点にボストンの特徴がある²⁷⁾。

最も貧しい地区の1つであるパーメンター街礼拝堂に設置された〈砂場〉は、7・8月にかけて週3日、朝に開かれた。近隣の4歳から10歳児およそ15人ほどが集まり、小さな木のシャベルで砂を掘ったり、数え切れないほど砂でパイを作り、歌を歌ったり、近所に住む女性の指導の下で行進したりした²⁸⁾。この成功によって、1887年までに11カ所に〈砂場〉が設置されたが、その1カ所は学校の校庭であった。翌88年には、ボストンの教育委員会は、7校の校庭に〈砂場〉設置を認めた。7校の内、5校は幼稚園教師による指導の下、幼稚園プログラムが採用され、夏期休暇中の8週間であったが、1日3時間、週4日と徐々に活動が拡大していく²⁹⁾。

さらに、1890年1月1日、MEHAは小学校の室内に設けた遊戯室を、近隣の9歳以下の子どもたちが冬季も遊べる遊び場として開放した³⁰⁾。16週間に及ぶ開放時間は、毎日正午から午後9時までであった。遊戯室のスタッフである幼稚園教師やソーシャル・ワーカーたちは、子どもたちの多くが連れてくる弟妹たちと、歌や踊り、ゲームをして遊んだり、赤ん坊の世話を追われた。家に帰れば、歌うことも、踊ることも、絵を描くことさえ許されない子どもたちが、衛生的で綺麗な白い帽子とエプロンを身につけ、スタッフらの行動を模倣する姿は、あたかも戸外遊び中心の幼稚園運動の成功を象徴するかのようであった。

3. 博愛主義者ショーとボストンの無償幼稚園

アメリカにおける1870年代の幼稚園の発展は、貧困・犯罪・衛生といった都市問題と対して語られることが多い。いわゆる移民の流入に伴う大都市の貧児の救済事業として、幼稚園は万能薬のごとく宣伝され、各地に発展していく³¹⁾。無償幼稚園発展の大きな原動力になったのが、ピーボディに触発されたショー (Shaw, P.A.) によるボストンの幼稚園への財政的支援である。1880年から90年の10年間に、アメリカの都市には100を超える無償幼稚園協会が存在したが、大都市の場合、ショーのように実業家の妻たちがその経費を担っていた。

ショーは公立学校の建物の中に無償幼稚園を開設し、その経費を全額負担した。彼女の支援によって、幼稚園は成功を収め、地域救済の一役を担った。1883年までに、彼女はボストン、ケンブリッジ、ブルックリンの31の幼稚園を支援し、1877年には幼稚園教員養成校が彼女の尽

力によってボストン師範学校に設立された。ショーの功績は1882年から1889年までに20万ドルという多額の資金を投資しただけではない。幼稚園の教育的価値を広く認めさせ、幼稚園を公立学校体系に導入する上でも大きな力を発揮した。

児童研究運動家ホール (Hall, G.S.) の研究開始の出発点ともなった質問紙調査「新入学児の心的内容」がボストンの公立学校において実施できたのも、調査に協力する4人の幼稚園教師を保育から解放するために代替りの保育者を確保するなど、ショーの並々ならぬ協力体制に支えられていた³²⁾。ホールの児童研究は、限定された子どもの観察ではなく、質問紙に基づく大量の調査結果に裏付けられた教育改革の指針を可能にした。

1887年、ショーは自らが支援してきたボストンの14の無償幼稚園を公立学校体系の一部として導入しよう教育委員会に働きかけた。教育委員会はこの責任を担うことに同意し、市は1888年度の公立幼稚園の経費として、2万ドルを計上した。これによって、新たに5園が加わり、19の公立幼稚園が開設されることになった。

時を同じくして、1888年春、MEHAは砂場の設置場所を学校内に置くことを教育委員会に誓願した³³⁾。これを推進したのが同協会のタワー (Tower, E.M.) であり、委員会名も砂場委員会からプレイグラウンド委員会と改められた。1888年夏、ボストンの教育委員会は校内でMEHAによるプレイグラウンド事業の実施を許可した。協会主催の11の砂場の内、3カ所を除く8カ所が校内に設けられることになった。新たに砂場設置場所に選ばれた7校の殆どが、教育委員会支援の幼稚園プログラムを導入することになった。無秩序で道徳性に欠ける移民の貧児が学校のプレイグラウンドでの遊びを通して望ましい価値観を教えられるなら、学校への適応も容易だと教師たちは期待したのである。

プレイグラウンドの指導員を務めた幼稚園教師は、都市のゲッターや埠頭において生活する酔っぱらいの親から放棄された幼児の身体を保護し、退屈な生活を活性化させ、他者への思いやりを育むことに成功した³⁴⁾。しかし、警官の助手付きで指導される遊びは、7校区400人の子どもたちに正直、思いやり、上品な礼儀作法を教え込むことが目的で、きわめて教訓的であった。望ましい価値観や礼儀正しく行動できる子どもたちの数を増やすことには成功したが、プログラムに沿うことを嫌がる非協力的な子どもたちを仲間から拒否・排斥させるといふ、救済事業とは裏腹の結果をも生み出し始めた。

リトル・コモンウェルス校長ホーマー・レイン (Lane, H.) は、こうしたプレイグラウンドの問題点を的確に解説している。レインは1912年、政府認可の矯正施設であるリトル・コモンウェルスの管理運営を担うため英国に招聘された。レインがここで実践した自治に基づく共同

生活から強い影響を受けたのがサマーヒル・スクール校長ニール (Neil, A.S.) である。ニールはレインを通して、権威主義による抑圧が子どもの本性を歪めることを学んだ。そして、レインもまたデトロイトのプレイグラウンド監督者を務めていた時、子どもの実態から権威主義による抑圧が青少年の非行を生み出すことを発見した³⁵⁾。レインは多くの点で類似していた2つの都市にあるプレイグラウンドを比較した時、遊びを監督する教師の有無が青少年の犯罪件数に差をもたらす研究結果に注目した。財政的理由から監督者を置かないプレイグラウンドに犯罪の発生件数が少なかったのである。子どもたちは監督されていない遊びの中で、罪人、酔っぱらい、腕白小僧を英雄に仕立て上げ、警官や教師を打ち負かすゲームに明け暮れた。レインは悪漢、無法者、強盗らが11歳の子どもたちの自由遊びの勝利者であるという事実から、彼らが完全に大人の権威から自由になり、仲間とあばれることを許される時間が自己抑制を発達させるためには必要なだと結論づけた。遊びが子どもたちのあり余るエネルギーを解放し、子どもたちを非行・犯罪から遠ざける最も効果的手段となるには、権威主義的な指導者は必要ない。遊びが権威者からの承認を得るための手段と化す時、プレイグラウンドは子どもたちの遊び場ではなくなるのである。

ニューヨークのヘンリー・ストリート・セツルメントの指導者ウォルド (Wald, L.D.) が言うように、「セツルメントのプレイグラウンドほど印象的に近隣の生活に貢献したものはない。幼い子どもたちと関わりを持つ者が知っておくべき事は、彼らに何かを教える人間よりも、一緒に遊ぶ人間の影響力の大きさ³⁶⁾」である。子どもたちが親しみと尊敬を払うのは、学校で読み書きを教えた時、プレイグラウンドで遊びを監視する教師ではなく、子どもの行動を励まし、一緒に遊んでくれる大人だという事実であった。

プレイグラウンドの指導者の有り様が問われる中、3～5エーカー程度の方形からなる公園的要素とプレイグラウンドという2つの機能を併せ持った小公園の建設が、1900年頃から顕著となる³⁷⁾。こうした年間開放の児童遊園には、樹木や花を栽培し、芝生を植え、緑と木陰を楽しむ市民のために、池などが備えられ、「戸外体操場」には、子どもたちがスポーツや運動遊戯を楽しめるように、登り棒や綱、平均台、梯子、バスケット・ゴールなどが設置された。

II. 進歩主義幼稚園の確立と積木による実験

遊びの重要性を認識させる契機となった砂場設置は、子どもの遊びを指導する大人の役割を巡る問題点を浮き彫りにした。

ブライアンやヒルら進歩主義幼稚園運動家は眼前の子どもの状況と教材との関連からこの問題に取り組み、やがて極端なまでの子ども中心主義のレトリックがブラットによって完成されていく。

1. ブライアンと指示的遊びの解明

ブライアンが「全米教育協会」において行った「文字は人を殺す」という爆弾的報告で強調したのは、幼稚園を大人と子どもが即応的に生に共感し、その生を共有する生活の場に創り替えることであった。そのために用いられた活動形態の説明概念が、自由遊びと指示的遊びである。

自由遊びとは、言うまでもなく子どもの自発的な活動である³⁸⁾。ブライアンは、自由遊びにおいて、教師が為すべきことを次のように説明している。①子どもが初めて見たモノによって引き起こされた衝動や驚きを表現する自由と喜びを与えよ。②子どもが勝手気儘にふけらず、疲れない限り、対象物を丹念に調べようとする探求心を最大限に保障せよ。③子どもに自由な時間と空間を与え、「そのほんのわずかな退屈や資源の浪費、材料の弄びに備えて、新しい見解や実験を示唆し、導き、遊びが続くよう準備」せよ。④「幼稚園教師の適正な態度とは、共感性と準備周到な応答」にこそある。

では、指示的遊びとはどのような活動形態なのか。ブライアンは、「指示的遊びとは、臆病な子、素質に乏しく、発明の才に恵まれない子どもが教師の指示によって、ある思いを刺激され、それを成就する活動形態である。教師が共感をもって提示したある目的が、子どもを励まし、遊びへと導く。子どもが遊び始めたら、教師は援助が再び必要となるまで、その指示を差し控える。こうした方法は、注意散漫な子どもに、しばしば落ち着きと集中をもたらす。また、難解な構成活動に挑み、その努力にも拘わらず失敗した年長児には、わずかな指示が励ましとして役立つ」、そういう活動形態である、と説明している³⁹⁾。

ブライアンは、幼稚園教師が子どもの生を享受し、自由遊びを幼稚園の生活の土台に据えながらも、子どもに自己課題やイメージが持てない場合、それを子どもに代わって提示することの必要性を指摘している。その際の条件は、子どもが与えられた目的や課題を理解し、その結果を明確にイメージし、興味を持って取り組めるようにするということである。

こうしたブライアンの主張は、自園での指示的遊びに関する実験を根拠としていた。実験を実質的に指導したのは、ヒルである⁴⁰⁾。ヒルの経歴は後に回し、ブライアンとの仕事を述べておこう。ヒルは当時、神聖なシンボル体系と考えられていた恩物を、遊具として実験に用いた。この実験で子どもに与えられた課題は、第3、第4

恩物で紙の人形に合ったベットの作ることであった。

実験はブライアンに、恩物の順序性が創造的思考の連続に繋がるのではないことを確信させた。では、何が子どもに秩序ある思考力を育成するのか。子どもは明確な目的を目指して遊び始め、行動への手がかりを模索する中で、以前には気づかなかった関係性を発見する。思考力とはまさにこの結果ではないかと、ブライアンは考えるようになった⁴¹⁾。

そこで計画されたのが、単純かつ子どもの経験に関連し、独力で関連性が発見できる“おばあさんの家へ出かける”という課題遊びであった。この遊びの課題は、「教師に代わって、模倣へと駆り立て、子どもを創造的にする。さらに、子どもを予感との関連性や暗示によって動かし、思考を意識的に働かせる。のみならず、それは子どもに形態の種類を比較・測定、関連づけさせ、必然的に判断・決定を迫り、ある結論に到達させる。子どもの内面には、こうした論理的で秩序をもった過程が自然な連続性として進行している。この連続性を現実のものにするには、受動的で、文字通りの連続性ではなく、活動的で創造的な連続性こそを意識的に経験させるべきだ」(傍点：原文)ということ認識させた⁴²⁾。

デューイ (Dewey, J.) の論文は、この間の動向を明確に指摘している⁴³⁾。「幼稚園が子どもの自発的な遊びの研究から集められた事実に基づき、遊びの理論に照らして、幼稚園の実際を検討すべき時が来た。子どもの年齢差、性差、人種差、社会環境の差、もろもろの個人差に照らして、実際面が考慮されねばならない。……心理学的観点から幼稚園の理論と実際を研究することは重要である。何となれば、それによって教師は哲学的理論の抽象的で一般的命題を具体的な生きた人間に即して解釈でき、心理学によってすべての教育材料や作業を個人の能力と目標に適合させることができるからである。心理学を幼稚園の実際に適用することは、それにもっと力を与え、人間的にすることを意味している。」

1904年、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジに招聘されたヒルは、子どもの自発的な活動を園生活の中心に据え、そこに展開する仲間との自由さを契機に、人との関わりを学び・深める場の創造を目指し始める。この萌芽的実験が、1905年、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジのスパイヤー・スクールに設置された「実験的遊戯室」である。

設置目的は、教師がその立場を離れて自由に子どもを観察し、遊戯室に組織された自治 (self-government) の初歩が子どもに及ぼす影響を確認することにあった⁴⁴⁾。子どもが自らの経験や仲間との相互の助け合いを通して学べるよう、目的・計画を自ら創案 (initiation) し、かつ実行できる適切な環境が整えられた。しかし、こうした自治訓練による試みは、当時の学校関係者の十分な理

解が得られず、実験はわずか1年足らずで、中断を余儀なくされた。

中断による思いをバネにヒルは新しい問題の解明に向け、実験を開始した。「子どもの一見無目的で無価値に見える自発的な活動のうちに、価値あると認められる目的のよりどころとなる何かが発見できないか。もし適切に指導されるなら、こうした粗野な表現の幾つかが、後には美術や工芸の端緒となるのではないか。子どもの個性と自由とを保つために、どれだけ自己主導的活動が必要なのか。教師は子どもの成長を促すために、子どもに適正な問題や目的が設定できるのか。さらに、教師は子どもが自己主導的活動によって獲得するのと同じ位の素晴らしい熱意を、それらによって鼓舞させることができるのか」という問題である⁴⁵⁾。1915年から、ヒル指導のもとに開始された実験は1923年『幼稚園及び1学年級の行為課程』(A Conduct Curriculum for the Kindergarten and First Grade) にまとめ上げられた⁴⁶⁾。

2. ヒルと床上積木の開発

では、ヒルの床上積木開発を彼女の経歴を交えながら説明しておこう。ヒルは1868年3月27日、ケンタッキー州アンカレッジに生まれた⁴⁷⁾。父ウィリアムはベルウッド女子セミナーを開校しており、ヒルもまたそこで教育された。父は6人の子どもたちや学生達に独立心の強い職業女性となることを求めた。母マーサは兄弟と一緒に大学への入学を希望したが許可されず、家庭教師によって高等教育を受けた。そうした経験がベルウッド女子セミナー開校に影響を与えたことは想像に難くない。

母マーサが子どもたちのために室内外に設けた遊び場は大工仕事に必要な道具、鶏小屋、大きな板、積木、空の樽などを備えていた。女性が結婚して家庭を持つことは悲劇だ。女性は高等教育を受けて自立すべきだという当時では珍しい両親の考えに従い、彼女はルイスヴィル大学協会で古典的な教育を受け、1887年に卒業した。卒業後直ちに、ヒルはブライアンが新たに組織したルイスヴィル無償幼稚園協会の養成部門に入学。5人の学生の1人となった。課程を修了したヒルは1889年2月、協会主導の幼稚園の指導者となるようブライアンから要請された。ブライアンと共に、ホールの夏期講座や共同研究に加わるようになったヒルは1893年、シカゴに去ったブライアンの後を受け、ルイスヴィル無償幼稚園協会の指導者となった。

ヒルは幼稚園に常設すべき遊具に6つの基準を設けた⁴⁸⁾。その6つの基準とは、①子どもの自己活動を刺激し、子どもに発明の才、独創性、器用さ、勤勉さを育むこと。②子どもの発達レベルに見合っていること：遊具は成功感をもって取り扱えるよう、子どもの操作する力、興味、組織力に適していること。③遊具は美を創造

する願望を刺激すること。④子どもの小さくて未熟な手に過重な負担を強要せず、学びの過程に耐え、優れた技術の習得をもたらすこと。⑤衛生的で、清潔であること。⑥大人の干渉や仲間の協力がなくとも、子どもが一人で遊ぶために選ばれるものと、子どもたちの社会的協力を刺激するために選ばれるものがあること、である。

ヒルが開発した床上積木は、上記の6つの基準を満たすと共に、子どもたちが作りたと思った家や荷車を組み立て、実際にその中に入ったり、乗って遊べる大きさと耐久性を備えたものである⁴⁹⁾。一連の大型積木、支柱、車輪、棒からなる⁵⁰⁾ヒルの床上積木はカエデの木から作られている。まず、大型積木は最小3×3×1.25インチ(7.6×7.6×3.2cm)、最大36×3×1.25インチ(91.4×7.6×3.2cm)の7種類に分けられる。15インチと27インチの2種類の長さからなる支柱には、深い溝が刻まれ、積木を差し込み固定して上手く繋ぎ合わせれば、どんな高さの建物も作ることが出来る。支柱の上下に作られた穴に銅線棒と梁を差し込めば、建物は崩れる心配もなく、安全性が保たれる。積木と支柱を組み合わせれば、子どもの創意によって、大きな1室からなる家、小さな複数の部屋からなる家やアパート、2階建ての家、列車の駅、店など数限りない建築物ができる。



写真1

Garrison, C.G., *Permanent Play Materials for Young Children*, Charles Scribner's Sons, 1926, p.27.

上の写真1はヒルの床上積木で作った汽車に乗っている子どもたちである。子どもたちは支柱部分を床に置いて積木・棒・車輪で作った汽車を走らせる。写真からも分かるように、子ども2人が十分に乗れる大きさの汽車と、後ろには乗客が待つ駅がある。汽車だけではなく、15インチの支柱に、36×24インチの積木を組み合わせれば素晴らしいボートにもなる。

また、床上積木があれば、大きな荷車を園に常設する必要もない。36×24インチの積木に棒と車輪を組み合わせれば、子どもたちの手で荷車を作ることが出来る。棒は積木に前もって開けられた穴に差し込み、車輪をコッ

ターピンの付いた棒で固定すればはずれる心配もない。これなら、遊びが終われば外して元通りに片づけられ、場所をとらない。しかも、子どもたちがこうした荷車を通りの車、サーカスの車、汽車など、変幻自在に変えることができ、作る喜びを味わいながら、技術も高められるように考えられていた。

3. プラットと子ども中心主義教育

ヒルの積木を使った遊びは、プラットの新学校設立に重大な影響を及ぼした。プラットはコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジで、ヒルが指導する幼稚園で積木遊びを見学し、「この自由な遊び時間は、保育の一部ではなかった。しかし、私は子どもたちが短い時間内に積木で好きなことを為す様子を観察した。私にとって、この遊び時間は園生活の最も重要な時間のように思えた」と回想し、ヒルの床上積木を高く評価した⁵¹⁾。

しかし、プラットはヒルの積木に満足せず、もっと柔軟性と融通性を兼ね備えた教具の考案を目指し始める。

(1) 子ども流学習法の発見

プラットは1913年、ウエストサイドのセツルメント、ハートリー・ハウスの一室で近隣で5歳児6人を選び、実験を開始した。彼女はそこに、自らが作った積木や手作りの玩具、クレヨンと紙、粘土などを単純かつ魅力的に整え、子どもたちが独力で探し回ることを許した。遊具をごちゃ混ぜにしたり、喧嘩の日々が1ヶ月続き、懐疑的になり始めた頃、1人の子どもが積木を使って通りをレイアウトする様子に気付いた。その姿は「実験室で実験に勤しんでいる科学者のようであった。……積木に助けられながら、彼は全精神力を使い、関係性を推測し、結論づけていく。その関係性とは、店と配達用荷馬車、川のはしけから積まれた石炭車と家庭に運ばれる積荷との関係であった」。積木による床遊びに、プラットは子ども流学習法を発見したのである⁵²⁾。

プラットが設計した積木の標準サイズは、1³/₈×2³/₄×5¹/₂インチ(3.5×7×14cm)で、幅は厚さの2倍、長さは幅の2倍になっている。積木の幅や厚さ、長さの関係はその比率を2倍、3倍、半分のものがあり、形態には棒、三角形、円柱なども含まれている⁵³⁾。こうした積木や玩具が子どもたちの思考を促す前提は、子ども自身が頼るべき関連知識を持ち合わせていることである⁵⁴⁾。「散策」はこの関連知識を収集する機会として重視された。

プラットは1914年、スミス(Smith, E.)の財政援助を得て、グリニッチ・ヴィレッジ4番12番通りのアパートに学校を開設。当初から、プラットは4、5歳児6人の子どもたちと共に埠頭までの道のりをよく散策した⁵⁵⁾。カリキュラムに位置づけられた「散策」は、情報収集の

機会であった。初めての散策では、子どもたちが恥ずかしがってなかなかタグボートやはしけの船員に質問しない。しかし、プラットがやってくれないことを悟ると、やがて勇気を奮い起こして行動する。しかも、労働者たちの答えは子どもの気後れを吹き飛ばすほど友好的であった。埠頭に繋がれた荷馬車に腰を下ろし、プラットも子どもたちも、タグボートが積み荷を積んだはしけを引いて埠頭を出て行き、空のはしけを引いて埠頭に戻ってくる様子を飽きずに眺めた。

学校に戻った子どもたちは、今散策で見てきた事実を積木を使って表現する。さまざまな種類のはしけを牽引し、埠頭に停泊したり外航する大洋定期船を助け、合図の警笛を鳴らして疾走する、タグボートの姿が見事に描



写真 2

Pratt, C., *I Learn from Children*, Haper & Row, 1947, p.34

き出されていく。そして、長方形のブロックをボートに見立てていた子どもも、尖った船首を作ろうと作業台での大工仕事に挑み始める。このように必要が生じた時、子どもは道具を使用する方法を学び、自分の目と手で形を確かめながら納得いくまで追求する⁵⁶⁾。

プラットは子どもたちが学習すべき諸事実を散策による直接経験によって観察させ、それを教材を用いた遊びの中で再現させ、発見の過程を辿らせる。知識はそうした知性的経験を通して再構成されると考えられていた。

写真2は、積木を使った子どもたちの町作りである。このように散策したマンハッタンが積木で表現されるために、教師は「子どもたちが探索したくなるように刺激し、大切な発見が出来るような散策を計画」し、「環境を子どもたちの図書館として使用」できるように情報を収集しておく必要がある⁵⁷⁾。

プラットのプレイ・スクールが極端なまでの子ども中心主義と言われるのは「子ども集団が教師による読み・書き、大工仕事や音楽などの教授を受け入れることも、拒否することもできる自由を与えられるまで、実験的教育法は採用されてはいない⁵⁸⁾」とまで主張した、子どもの自由に対する考え方にある。

(2) 床遊びの実際と教師の働きかけ

では少し長くなるが、6歳児の積木遊び（1924年1月3週目）のエピソードを紹介しながら、子どもたちの探究の過程と人間関係の育成を明らかにしておこう⁵⁹⁾。

子どもたちは積木を使って散策で収集した情報を整理し、その記憶した情報に従い再現を試みている。その情

<月曜日>散策について話し合った後、メタは「自由の女神像を作りたい」と言った。①私がメタに、「自由の女神像をどこに置くの」と尋ねると、メタは「湾に」と答えた。アルバートは「ガバナーズ島を作るつもりだ」と言った。ソニアは“ニューヨークの基部”である「バッテリー公園とスタッテン島の栈橋を作る」と言った。②私は子どもたちに、「この部屋のどこが湾に当たるの」と尋ねた。子どもたちは南の端を正確に指さした。次に、「ニューヨークの東には何があるの」と聞くと、子どもたちは「イースト川」と答えた。③私は西がハドソン川になると繰り返して、チョークで2本の線を床に引いた。

川が引かれるとすぐ、フローレンスはニューヨークの小高い場所に「6番街を作る」と言った。フレッドは「16番街に自分の家を作る」と言った。エドナはニュージャージーにラカワナ鉄道を敷くことに決めた。ソニアはスタッテン島を作りたい。そこで、④私はどこに作るつもりか尋ねた。ソニアは自分の思っている方向を示すために、部屋の隅に、チョークで線を引いた。

アルバートとメタは小さな島を表すために、積木を平らにして置いた。2人とも島は4角ではないが、積木で何とか円形にできると感じていた。メタはベドロウズ島を、ガバナーズ島がある湾と同じ湾に作り始めた。しかし、⑤私が示唆を与えるとメタは地図を見て正しく作り直した。メタは台座を作り、その頂上に人形を置いた。人形は片手を上げてまっすぐに立ち、その手には灯りを表す小さな粘土の壺がかぶせられた。この人形は何回も倒れたので、メタはついに、リチャードが書いた自由の女神像の絵を取って来て、2つの積木に画鋲でとめた。そうすればまっすぐ立つ自由の女神像になると考えたからである。

メタの反対側、湾を横断したところで、アルバートが夢中でガバナーズ島を作っていた。アルバートは2つの灯台を建て、積木を丸く積み上げてとりでを作った。

ソニアは5つの水槽の小さな囲いが付いたバッテリー公園水族館を作った。ソニアはそのうちの1つにアルバートの作った粘土のせいうちを置き、もう1つに、フェイスの粘土の亀、もう1つにセリアの金魚、リチャードの作ったアヒルを置いた。それから釘で鍵をかけるフェンス（子どもたちが11月と12月の農場遊びのために作ったもの）を持ってきて、公園を表す小さな囲いを作った。公園には木を一本と草を少し置いた。この下に、ソニアは渡船場を作った。切符売場に通じる狭い

入口を作り、切符売場には切符を買うための小さな窓の付いた4角い小さな囲いをした。囲いの中にテーブルを置き、人形を2つ置いた。そして、小さな赤と青の切符を作った。“赤は大人用、青は子ども用”であった。これが終わるとソニアは切符の箱を作り、箱の側にそれを見る人形を座らせた。次に、フェリーボートが錨を解く場所と、フェリーボートを作った。

フローレンスはその間、小高いところにある6番街を作っていた。これはマンハッタン島の中心街の南へと通じていた。そして本当の“高架鉄道”のように東へとカーブしていた。1つの信号はその曲がり目に置かれていたが、それは私たちが散策で見た通りであった。そしてもう1つの信号がバッテリー公園駅の正面に置かれていた。精巧な階段が地下へと通じていた。

フレッドは「16番街の私のアパート」と言っ、大きな6階建てのアパートを作った。彼は熱心に作り続けた。セリアは三角形を利用してレビアン（巨船）を作った。これは先週男児たちが作った定期船ほど大きくはなかったが、形は非常に正確であった。……

昼寝の後、子どもたちは仕事に戻った。フェイスとセリアはマンハッタンの北側に教会を建てた。彼らは説教台に牧師を取り付け、その前に人形を列に並べて座らせた。ソニアがスタットン島にフェリーを走らせている間、「そこには全く家がない」と不平を漏らした。メタはすぐにそこに家を作ると言った。……

フレッドはアパートを作り終え、人形の棚に行くとき人形の大半が教会に利用されていることに気がつきがっかりした。⑥私は教会では食事や宿泊ができないので、人形はフレッドの家に住み、礼拝のために教会に出かけるようにしてはどうか提案した。

フレッドがすぐに教会から人形を出そうとし、セリアが「私たちはお説教の真っ最中よ」と言って激しく抗議したことを除いて、提案は受け入れられた。……ソニアが誰も水族館に来てくれないと泣きそうになっていると、フレッドが家族全員でやって来ると言った。彼は入口の所に人形を整え、展示物を見ながら、数分間立っていた。側を歩いていたフェイスはソニアが亀を金魚の入った大きなボールの後ろに置いているので、亀が全く見えないと言った。……

<火曜日>フレッドとソニアは、すぐにフェリーボートのところに駆けていった。フェリーボートには、フレッドの人形が前の日から待っていた。2人は湾にフェリーボートを降ろすと、自由の女神像の前を通過し、ガバナーズ島を通って、スタットン島の湾に入れた。フレッドは急いで赤いランプを取りにゆき、それをソニアに渡して、私たちが散策で見た光景を再現するために、棧橋の端に置かせた。フレッドは自分の人形を船から取り上げ、貨物列車を見せた。しかしソニアがすぐに「12時です、フェリーが出ます。」と叫んだので、急いで人形を帰りの船に乗せた。ソニアはニューヨークの棧橋に着くとすぐ、フェリーの出発時間が分かるように積木の時計を作った。フレッドは人形を高いところにある駅に連れて行き、どこで切符を買えばよいのか尋ねた。フローレンスが、切符売場を自分で作り、切符を売った。そこで人形は列車に乗せられた。……

報の正確さは、ソニアの切符売場の小窓や子ども用と大人用の切符、フローレンスの信号の位置からも明らかである。さらに、メタが何度も倒れる自由の女神像の人形を女神像の絵を2個の画鋏でとめたもので代用したり、フローレンスの駅から下へと通じる階段の製作など、子どもたちの反省的思考を促すような問題解決を難なく行っていることが分かる。

そして、子どもたち同士の活発な批評が、積木による町づくりをドラマ化し、人間関係を深める起爆剤になっている点に注目しておく必要があるだろう。ソニアの「家がない」という不満は、メタを動かし、フレッドの人形がないことへの落胆が、ソニアの誰も水族館に来てくれないという悲しみを理解する共感を生み出す。しかもその関係は翌日まで続き、フローレンスを巻き込んで、フェリーボートでの小旅行を盛り上げている。

さて、子どもたちが自分たちを取り巻く社会生活の細部をこのように苦心して再現できるのも、それを支える教師の働きがあるからである。子どもたちがドラマを展開し始めるのも、教師の働きかけが契機となっている。波線①～⑥は、教師の働きかけを示したものであるが、①～④までは子どもが散策を通して得た情報に基づく判断の確認である。波線⑤はメタにガバナーズ島と自由の

女神のあるペドロウズ島との位置関係を確認し、修正させている。こうした関係性をしっかり考えさせることが、水族館の亀が見えないといった指摘を生み出すなど、散策での情報を整理する基礎づくりになっている。

最も重要な教師の働きかけが波線⑥に見られる。波線⑥は子どもたちの相互協力を促し、ドラマ化の契機となった教師の働きかけである。人形の殆どが教会の製作に使われ、フレッドのアパートに使える人形は残っていない。アパートと教会の両方で使える方法として、人形を仲良く分けるように示唆するのではなく、教会では宿泊や食事ができないことに気付かせ、生活の場であるアパートと礼拝の場としての教会を結びつけていける教師がはたしてどれくらいいるだろう。子どもの心に寄り添える働きかけであったがゆえに、若干の譲歩と協力が必要ではあったが、子どもに受け入れられたのである。そして、フレッドがソニアの気持ちに共感し、ドラマ化を進める素地を築いたのだと言えば言い過ぎだろうか。

おわりに

1885年、ボストンに設置された砂場や、フレーベル主義保守派の一斉画一的な保育の改革を目指して開発され

た大型積木は、私たち大人が遊びに秘められた子どもの心の叫びや子ども流学習法を学ぶように訴える契機となった。子どもの遊びや学びを一元化することは子どもに過重な負担をもたらす。アメリカのプレイグラウンド運動や進歩主義幼稚園改革運動はその誤りの重大さを伝えている。

2005年9月23日の新聞は、小学生の教師に対する暴力増加を大きく報じた⁶⁰⁾。中高生の校内暴力が減少し沈静化したのとは対照的に、小学生の校内暴力への歯止めがかからないと言う。親からの暴力や構って貰えない寂しさ、詰め込み教育によってもたらされるストレスなど暴力を生み出す背景はさまざまだが、子どもの傷を受け止めじっくり聞く大人の存在が求められているわが国において学ぶべき点は多いのではないだろうか。

注

- 1) Rainwater, C.E., *The Play Movement in the United States: A Study of Community Recreation*, The University of Chicago Press, 1922, pp.22-23.
砂場の設置については、笠間浩幸著『〈砂場〉と子ども』東洋館、2001年が詳しい。
- 2) Bryan, A.E., "The Letter Killeth," National Educational Association, *Journal of Proceedings and Addresses*, 1890, p.573-581.
- 3) *ibid.*, pp.577-578.
- 4) *ibid.*, p.575.
- 5) *ibid.*, p.576.
- 6) Snyder, A., *Dauntless Women in Childhood Education 1856-1931*, Association for Childhood Education International, 1972, p.78.
- 7) Lascarides, V.C. & Hinitz, B.F., *History of Early Childhood Education*, Falmer Press, 2000, p.266.
- 8) Beatty, B., *Preschool Education in America, : The Culture of Young Children from the Colonial Era to the Present*, Yale University Press, 1995, p.116.
ヒルのコロンビア大学への招聘は1904年と1905年という2つの説がある。
- 9) Stockham, C.L., "The Louisville Free Kindergarten," *Kindergarten Magazine*, 1, January, 1889, pp. 281-282.
- 10) 一番ヶ瀬康子『アメリカ社会福祉発達史』光生館、1964年、77-93頁。
- 11) 小学校への幼稚園教育の導入については、拙稿「アメリカにおける幼稚園教育の大衆化と幼児教育改革の課題」『アメリカ教育学会紀要』第4号、1993年、1-10頁を参照。
- 12) Dickason, J.G., *The Development of the Play-ground Movement in the United States: A Historical Study*, Universarity Microfilms International, 1979, p.31.
- 13) Snyder, *op. cit.*, p.31.
- 14) アメリカ初のドイツ語幼稚園は1836年、ドイツ移民フランケンブルグ (Frankenberg, C.L.) によってオハイオ州コロンビアに開設された。これはシュルツの幼稚園よりも遡ること20年となる (Lascarides & Hinitz, *op. cit.*, p.236.)。
- 15) Shapiro, M.S., *Child's Garden: The kindergarten Movement from Froebel to Dewey*, The Pennsylvania State University Press, 1983, pp.1-17.
- 16) Strickland, C.E., "Paths Not Taken: Seminal Models of Early Childhood Education in Jacksonian American," in B.Spodek (ed.), *Handbook of Research in Early Childhood Education*, Free Press, 1982, pp.321-340. 森田尚人「アメリカにおける家族の構造変化と子ども観・女性観の転回」村田素彦編著『生活課題と教育』光生館、1984年、230-260頁。
- 17) Lascarides & Hinitz, *op. cit.*, pp.239-240.
- 18) Peabody, E., "Development of the Kindergarten," in H. Barnard, *Papers on Froebel's Kindergarten, with Suggestions on Principles and Methods of Child Culture in Different Countries*, Office of Barnard's American Journal of Education, 1881, p.10.
- 19) Ronda, B.A., *Elizabeth Palmer Peabody: A Reformer on Her Own Terms*, Harvard University Press, 1999, p.301.
- 20) Peabody, E., *Lectures in the Trainings Schools for the Kindergartners*, D.C. Heath & Co., 1886, p.87.
- 21) *ibid.*, pp.75-76.
- 22) *ibid.*, p.80.
- 23) Dickason, *op. cit.*, p.43. 笠間、前掲書、62-66頁。
- 24) *ibid.*, pp.35-37.
- 25) Rainwater, *op. cit.*, p.22. ウエストエンド保育所に設置された砂場が、2歳に満たない幼児が砂を巧く使えず、目に入れるなどしたため、短期間で閉鎖された。
- 26) Dickason, *op. cit.*, p.34.
- 27) *ibid.*, p.58.
- 28) *ibid.*, pp.48-49. Rainwater, *op. cit.*, p.22.
- 29) *ibid.*, pp.60-61.
- 30) *ibid.*, pp.66-72.
- 31) 無償幼稚園の発展については、拙著「無償幼稚園の発展とセツルメント事業」『日本の教育史学』第38集、1995年、306-324頁を参照。

- 32) Lascarides & Hinitz, op. cit., p.249. ホールの研究は幼稚園プログラムを備えた学校の校庭で MEHA 支援のプレイグラウンドを実施する上にも大きな影響力があった。
- 33) Dickason, op. cit., pp.60-62.
- 34) *ibid.*, pp.62-64.
- 35) Wills, W.D., *Homer Lane : A Biography*, George Allen & Unwin Ltd., 1964, pp.60-61.
- 36) Wald, L.D., *The House on Henry Street*, Dover Publications, 1971, p.84.(First Published by Holt, Rinehart and Winston, 1915)
- 37) Rainwater, op. cit., pp.70-90.
- 38) Bryan, op. cit., p.577.
- 39) *ibid.*, pp.577-578.
- 40) Forest, I., *Preschool Education : A Historical and Critical Study*, MaCraw-Hill Book Co., 1927, p.33.
- 41) Bryan, op. cit., p.575.
- 42) *ibid.*, pp.575-576.
- 43) Dewey, J., “The Kindergarten and Child Study,” National Education Association, *Addresses and Proceedings*, 1897, p.586.
- 44) Hill, P.S., “The Spyer School Experimental Play Room,” *Kindergarten Review*, 17, 1906,
- 45) Dewey, J. & Dewey, E., *Schools of To-morrow*, in *Middle Works* 8, 1915, p.280.
- 46) Burke, A. et. al., *A Conduct Curriculum for the Kindergarten and First Grade*, Charles Scribner’s Sons, 1923, pp.22-25.
- 47) Lascarides & Hinitz, op. cit., p.260.
- 48) Hill, P.S., “Introduction,” in C.G. Garrison, *Permanent Play Materials for Young Children*, Charles Scribner’s Sons, 1926, pp.xv-xvi.
- 49) Lascarides & Hinitz, op. cit., p.266.
- 50) Garrison, op. cit., pp.26-30.
- 51) Pratt, C., *I Learn from Children*, Simon & Schuster, 1948, reprinted by Haper & Row, 1990, p.27. プラットの遊び論については、拙稿「キャロライン・プラットの遊び論の研究 — 想像力を育む幼児教育 —」『教育方法学研究』第22巻, 1997年, 87-95頁を参照。
- 52) *ibid.*, pp.29-30.
- 53) Johnson, H.M., *The Art of Block Building*, John Day Company, 1933, p.7.
- 54) Pratt, C., “The Play School : An Experiment in Education,” in C. Winsor(ed.), *Experimental Schools Revisited*, Agathon Press, 1973, p.28.
- 55) Pratt, *I Learn from Children*, op. cit, pp.42-43. 佐藤学著『米国カリキュラム改造史研究 — 単元学習の創造 —』東京大学出版会, 1990年, 155頁。
- 56) *ibid.*, p.43-44.
- 57) Mitchell, L.S., *Young Geographers*, Bank Street College of Education, 1990, p.16.
- 58) Pratt, C., “The Play School,” op. cit., p.23.
- 59) Platt, C. & Stanton, J., *Before Books*, Adelphi Company, 1926, pp.207-210 & p.212.
- 60) 朝日新聞 (2005.9.23)

The Reform Movement of Progressive Kindergarten and Playground in America

— Suggestions by Sand Gardens and development of Large Block Set —

Kimiyo HASHIKAWA

The purpose of this paper is to analysis on the reform movement of progressive kindergarten by suggesting sand gardens and the development of large blocks.

The playground movement in the United States began to develop from sand gardens opened in Boston in 1885, under the control of the Massachusetts Emergency and Hygiene Association. The member of this Association, Dr. Marie Zakrzewska pointed out that in Beline there were placed in the public parks sand-pales, in which children dug and played, and suggested that something of the kind might be done in Boston. The playground advocates viewed organized play as a vital medium for shaping the moral and cognitive development of young children. Organized activities in these playgrounds ranged from sandcastle-building by four-year-olds to adolescent team sport.

The Progressive kindergarten movement began to challenge the prescribed mathematical sequence used in working with Froebel's gifts by Anna Bryan and Patty Smith Hill in Louisville Free Kindergarten Association. Distinguishing between what she called "free play" and "dictation play", Bryan began incorporating themes from children's daily lives into the sequence of Froebel's gifts. This introduction of child-initiated topics to teachers-controlled curricula became a start to an enormous curricula change later. In 1904, Dean Russel of Teachers College, Columbia University in New York invited Hill to participate in a lecture series with Susan Blow. Hill used the large blocks which she developed in the Teachers College schools. The blocks were a popular choice of teacher-initiated project related to community workers, families, and transportation.

Caroline Pratt had seen children free playing with Hill's blocks at Teachers College, and she realized this was how children learned about the world. Opend in New York City, in 1914, Pratt's Play School, which was one of the most radical experiments in Progressive education in early twentieth centuries. Pratt and six children spent a great deal of time at neighbor dock. Those trips were the basis of the curriculum for the young children. When the children had been on trips exploring the immediate environment and returned to classrooms, they took block buildings on the floor and bench-made products. Here the children put to use the facts had acquired.

By analyzing the effects of sand gardens and development of a large block, we would have a better understanding what kind of change happen from the playground movement to the progressive kindergarten movement.